

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04062

研究課題名(和文) キャリアデザイン・ツールの開発 若者の選択、移行、適応支援のために

研究課題名(英文) Development of career design tool: supporting decision, transition and adaptation among youth.

研究代表者

安達 智子 (Adachi, Tomoko)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40318746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、仕事社会に参入する前段階にある若者層のキャリアデザインについて検討し、教育・支援に活用するためのツールを開発した。主たる成果は以下の点にまとめることが出来る。まず、ジェンダーによる意識的、無意識的な影響過程とくに職業イメージによる作用を確認した。これを踏まえるならば、「同性が少ないので自分には難しいのではないか」といった意識は、職業情報の発信や解釈の過程に介入することによって変わり得るといえる。さらに、ワーク・シートを開発・試行するなかで、個人が情報源に気付いたり解釈の仕方を転換させたり、あるいは認知の歪みを捉え直すことで、キャリア自己効力の見積もりが変容するとの結果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、職業の男女占有率、職業イメージ、自己効力の間にあるつながりを確認した。これを踏まえて、職業情報の発信や解釈の仕方、若者の職業探索の方向付けについて提言を行うことが出来た。また、若者の来設計は、自身の展望と配偶者に想定する展望が入れ子構造を成すことを見出した。これを受けて、グループワークに活用できるワーク・シート考案した。今後その活用に向けてインストラクションや事例等を整備し社会に還元していく予定である。また、自己効力の情報源をもちいたワーク・シートについては、大学生版にくわえて、小中学生版、英語版も開発し、幅広いキャリア教育場面に成果を還元した。

研究成果の概要(英文)：Current research project focused on career design among youth who are in preparation for employment, and developed tools which are available for career education and career support. The major findings and achievements are as follows; Firstly, it was confirmed that gender stereotypes and vocational images affected career self-efficacy. Considering the facts, negative images and career self-efficacy can be improved by interventions. The interventions should include modifying the way how society transmits job information and interpretation about it by individual youth. Thirdly, worksheets were developed and attempted in career education classes. The results showed that participants improved career self-efficacy by interpreting informational sources, finding out one's negative cognitive bias and modifying one's way of thinking. Future direction includes enrichment of manual and backup materials and supplement to enhance career guidance and support.

研究分野：キャリア教育、ジェンダー

キーワード：キャリア教育 青年 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

グローバル化, 高度情報化, 国際競争の激しさが増す今の時代において, キャリア支援やキャリア教育は適材適所をおこなう選択支援から, 自らキャリアを形成する能力の育成へと大きな転換期を迎えている。すなわち, これまでの支援では, 就職先の絞り込みや内定獲得に向けた「選択」の手助けに力が注がれていた。しかし変化の激しい今の時代に内定先の確保だけではゴールとはなり得ず, 選択した後も不測の変化が起きることが前提になる。そうした状況下において, 若者たちは自らがおかれた環境と相互作用しながら選択, 移行, 適応のプロセスを循環させることになる。本研究は, こうした状況下にある若者層のキャリアデザインについて, キャリア自己効力とジェンダーの視点をとりいれて検討した。また, そこで得られた知見をもとにキャリア支援やキャリア教育に提言を行うこと, さらに, 個人・集団単位で活用できるツール作りを行い, その成果をキャリア教育の現場に還元することを狙いとした。

若者層のキャリアとジェンダーの関わりは, ワークとライフという 2 つのキャリアから検討することができる。ワークキャリアとは, すなわち就職や働くことに関するキャリアで, どのような職業や領域を選択するかと関わりをもつ。一方, ライフキャリアは, ワークにくわえて家庭生活や余暇などを含む生き方そのものをさす。就職したその先のキャリアデザインを可能とするためには, これらワークとライフの 2 側面を取り入れ, 将来について奥行きと横幅をもった展望が出来るように働きかけていく必要がある。

本研究で焦点をあてるキャリア自己効力は, 当該職業にまつわる諸活動を自らの力で成功裏に行うことが出来るという主観的評価のことをさしている。高い自己効力をもつことが望ましいキャリア行動や活動, キャリア形成に繋がりをもつとの結果が数多く報告されている。研究代表者は, これまでにキャリア自己効力の研究を重ねるなかで, 一般的な自己効力と同様にキャリア自己効力においても 4 つの情報源(Bandura, 1986)がその形成と変容に関わりをもつことを確認している。また, 認知バイアスともいえるようなネガティブに歪んだものの見方の作用によって, 望ましいキャリア自己効力が形成されにくくなることを見出した。さらに, 他国との比較調査から, 日本の若者はネガティブな認知の歪みをもちやすく, 自己効力を実際より低く見積もる傾向があることが見出された。本研究ではこれらの知見を踏まえて, 従来の情報源とネガティブな認知の歪みに対する認識をうながす要素をとりいれてワーク・シートを作成することとした。

2. 研究の目的

本研究は, 以下にあげる 3 つのリサーチクエスションに対応するかたちで, 調査, ツールの開発, そして, 教育場面における試行を実施した。

- (1) キャリア選択に, 男女占有率とジェンダー・イメージはどのように作用するか
- (2) 自身の生き方と配偶者に望む生き方はどのようなかたちでライフキャリアと関わりをもつか
- (3) 自己効力の情報源に着目したワークの可能性と限界点は何か

3. 研究の方法

重たる対象は, 大学生, 短期大学生および Web 調査の登録モニターとした。登録モニターは, 大学生と同年代のフリーター, 無業者など多様な層が含まれていた。大学生に対しては, 質問紙調査と教育場面におけるツールの試行への参加, ツールに対するフィードバックなどの協力を得た。Web 調査のモニターのうち, 大学生, フリーター, 無業者からは, ワークキャリアとライフキャリアの分析のための数値的なデータと自由記述の回答を得た。

4. 研究成果

(1) 若者のワークキャリア選択とジェンダー

最近わが国では, 非伝統的な職業領域に参入する若者が男女ともに増えてきた。しかしながら, 男女の占有率に差異のない中性職はいまだに数も領域も限られており, 若者のキャリア選択においてジェンダーの壁は乗り越えがたい障害として残されている。こうした性別職域分離現象に関わる心理的要因のひとつに自己効力の低さが想定される。かつて Betz & Hackett(1981), Hackett & Betz(1981) が指摘したとおり, 現代の仕事社会においても異性が優位な領域において, 若者は試行したり達成したりそれらを評価・承認される機会が少なく, ロール・モデルに恵まれないことが多い。また, こうした情報源の不足にくわえて, ある職業や領域について異性のイメージを抱くことが「これは異性の領域だ」「異性のやることはうまく出来ない」と自己効力を下げる方向に働くことが想定される。

ここでは, 典型的な男性職と女性職に男女占有率の開きが比較的少ない中性職をくわえて, 水平的職域分離の背景にある心理メカニズムを探った。結果として, 男女差の少ない中性職については, 男女ともにジェンダー・ニュートラルなイメージをもっており, ステレオタイプのイメージも, イメージからくる負の作用もみられなかった。また, 男性職, 女性職, 中性職いずれの領域においても, 主張性や決断力等を核とした作動性が自己効力を高める方向に作用していた。これらを踏まえると, キャリア支援の方向性としては, 男性が多い, 女性の領域だ等と性別をもとに職業世界を 2 分割して捉えるのではなく, 仕事内容や必要な知識・技術, もとめられる能力や資質などの要素から職業世界を理解するよう方向づけていくことがもとめられる。

(2)若者のライフキャリア展望

若者のライフキャリアについて2つの側面から検討した。1つは、結婚や出産などのライフイベントと仕事の兼ね合いすなわちライフコースの選択である。社会に出る前の男女に対して将来のライフコースについてたずねたところ、男性は9割を超える者が継続型を志望していたのに対して、女性で継続型を想定していたのは4割程度、子育てによる一時中断型も4割程度、他の1割は仕事によって労働市場を退くことを想定していた。すなわち、今の時代の若者はリベラル志向が強いと言われているが、いざ、自分の将来はとなると、伝統的なパターンに収束していくことが示された。

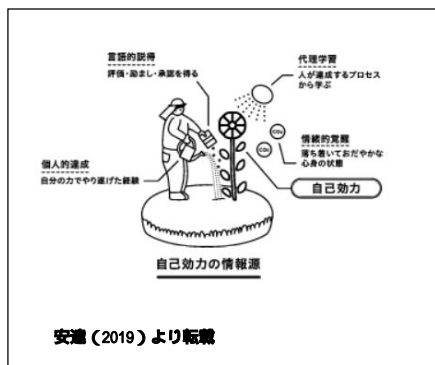
また、興味深いことに、調査対象となった若者が自分の将来として想定するキャリアパターンは、自分の配偶者にもとめるパターンと相似形をなしていた。すなわち、現代の日本社会には、男(女)性側の性役割態度と女(男)性側のそれが相互に作用して補完し合っつくられるジェンダー分業の相補的な構造(矢澤, 2009)が根強く残されたままなのだ。キャリア教育においては、自分の生き方や働き方について考えるだけでなく、将来の配偶者や家族のあり方を含めて将来像を描けるよう支援していくことが求められるよう。また、自身の態度や生き方が配偶者や家族を含めて様々な人に作用するという社会的存在としての個人を理解させることも大切なことといえる。

2つ目の視点は、将来の生活時間についての考え方である。ここでは、未婚で社会に出る前の若者層を対象として将来の生活時間の使い方について予測するよう求めた結果を掲載する。これより明らかとなり、男女ともに仕事に対してもっとも長い時間を配分しており、とくにその傾向は男子学生において顕著であった。また、男性は仕事、余暇、学習に配分する時間が女性よりも長く、女性は男性に比して家事と育児により長時間を配分していた。すなわち、ライフパターンの選択と同様に、一日のなかで限られた時間をどのような活動に費やすかについても、「男は主に仕事、女は主に家事」という新・伝統的性役割のあり方が反映されていた。

一方、こうした時間配分を個人で想定した後にグループをつくり、相互に想定時間の異同を話し合ったり、その実現可能性や理想と現実のギャップなどをディスカッションすることは、将来の生き方や働き方についてリアルなかたちで意識化させるための好機会になることも分かった。

(3)ワーク・シートの作成

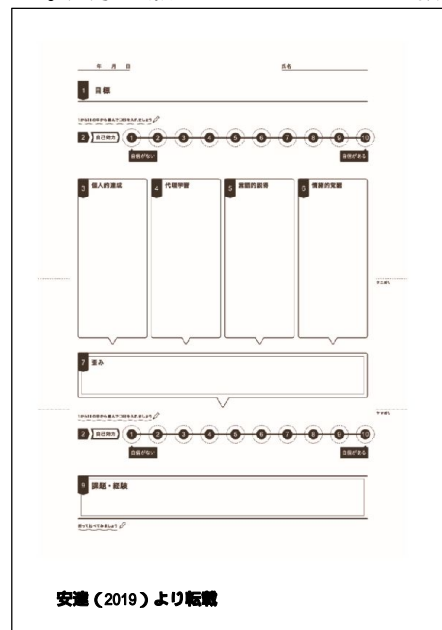
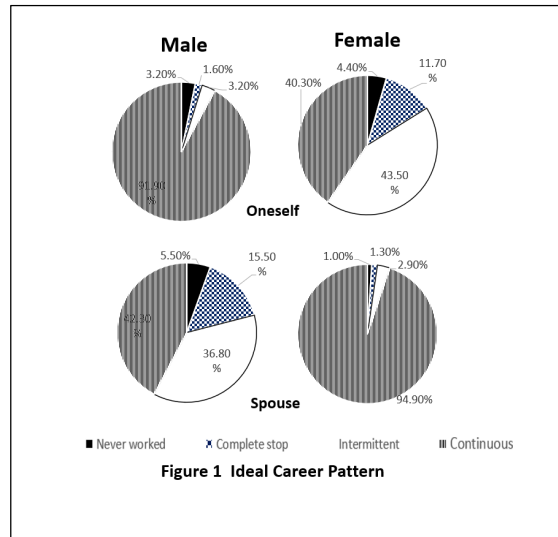
キャリア教育などの集団単位での実施と、キャリア支援や進路指導などの個人単位の双方で活用可能なツールの開発に着手した。内容としては、安達(2013)を基盤として、個人的達成、言語的説得、代理学習、情緒的覚醒の4つの情報源に対する気付きと、認知の歪みへの気付き、それらを踏まえた自己効力の見積もりの変化の3要素を柱とした。当初予定していた大学生を対象としたシートにくわえて、小学生・中学生版と英語版をくわえて3タイプを作成した。図に示すのは、安達(2019)に収録したワークシートの例示である。大学生版をもちいたキャリア教育



な方向に変化すると結果も得られた。一方で、漠然と抱いていた自己効力が、情報源を細かく確認することによって低下したという事例も一定程度みとめられた。

現在多くの働き掛けでは、自己効力を高める方向への働き掛けが推奨されており、キャリア支援や教育の効果を測定する際にも自己効力の上昇度合いが用いられることが多い。しかしながら、実際の能力を無視して単に自己効力だけを高めようとする働き掛けは、現実的な能力を認識するのを妨げ、能力と自己効力のギャップを大きくする危険性がある。また、個人が内省し努力することを妨げてしまう。

今後は、ワークなどのツールを活用して「現実の能力をやや上回る程度」の望ましい自己効力



にどのように近づけていくかという点に焦点をあてた働き掛けについて深めていくことがもめられよう。また、現行のワークシートは、キャリア教育の担当者や支援者が一定程度の知識や介入スキルを有することを前提に構成されている。これを、キャリア選択を行う個人が自ら題材を読み進めて実施し、自己採点や解釈を行い自己理解を深化させる助けとなるように、インストラクションや補助資料を拡充させていく必要がある。

<文献>

安達智子 (2019) . 『自分と社会からキャリアを考える 現代青年のキャリア形成と支援 』 晃洋書房

安達智子・下村英雄 (2013) . 『キャリア・コンストラクション ワークブック-不確かな時代を生き抜くためのキャリア心理学-』 金子書房

Betz, N. E., & Hackett, G. (1981). The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 329-410.

Hackett, G., & Betz, N. E. (1981). A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, 18, 326-339.

矢澤澄子 (2009). 男女共同参画時代と女性のライフキャリア 矢澤澄子・岡村靖子編 女性とライフキャリア 勁草書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 安達智子	4. 巻 58
2. 論文標題 女性とキャリア（シンポジウムの記録）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoko Adachi	4. 巻 3(3)
2. 論文標題 Psychological Determinants of Occupational Gender Division: A Study Focusing on Gender Stereotypes and Self-Efficacy	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 JAS4QoL	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tomoko Adachi	4. 巻 Jan 18
2. 論文標題 Work-family planning and gender role attitudes	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal of Adolescence and Youth	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tomoko Adachi	4. 巻 Vol. 1(3)
2. 論文標題 Quality of Life Achieved by Gender Equality: The Current Situation and Future	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Journal of Academic Society for Quality of Life	6. 最初と最後の頁 23-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 安達 智子
2. 発表標題 理系は男性職？ 職業イメージと自己効力に着目して
3. 学会等名 Kavli IPMU 国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構シンポジウム『数物系女子はなぜ少ないのか』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安達 智子
2. 発表標題 女性とキャリア」 / 学校適応はどのようにとらえられるか キャリア心理学の立場から
3. 学会等名 日本教育心理学会研究委員会企画シンポジウム 『達成動機とジェンダー』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安達智子
2. 発表標題 キャリア意識と決定プロセス
3. 学会等名 産業カウンセリング学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoko Adachi
2. 発表標題 Prospective Career Pattern and Time Allocation
3. 学会等名 日本キャリア教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoko Adachi
2. 発表標題 Career Planning among Japanese Young Adults: Do people with liberal mindsets make flexible plans?
3. 学会等名 Hong Kong International Conference on Social Science2016
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tomoko Adachi
2. 発表標題 How to manage work-life interface? : Attitudes among contemporary Japanese youth
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tomoko Adachi
2. 発表標題 Work-Life Balance: Examination on the future plans among Japanese students
3. 学会等名 4TH GLOBAL SUMMIT ON EDUCATION (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 安達 智子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 自分らしく生きるために：キャリア選択と支援（分担執筆） シリーズ公認心理師『感情・学校心理学』 （	

1. 著者名 (分担執筆) 自己効力：私の能力はどの程度？	4. 発行年 2016年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 50-60
3. 書名 中間玲子著『自尊感情の心理学：理解を深める「取扱説明書」』	

1. 著者名 安達 智子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昇洋書房	5. 総ページ数 202
3. 書名 自分と社会からキャリアを考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----